
ほしのくじら

まいまい?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほしのくじら

【Nコード】

N1591L

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

少年は、遠くの星からやって来た、おじいさんクジラと出会う。絵本的です。なので、挿絵表示を推奨します

1・流星の帰郷1

その日、部屋の窓から空を見上げていた。

夏の湿ったけだるい大気に、今までにないほどの満天の星空が映し出される。夏の大三角形は天の河に浮かび、落ちてくる星は水平線の向こうへと消えていく。

ほのかに明るい星の夜、その下を歩かずにはいられなくなった。部屋からそつと抜け出して、家の裏にある岬へと向かう。その場所はお気に入りの場所なのだ。悲しいことや嫌なことがあったときはもちろん、星が見たくなったとき、必ずそこへ行くのだ。

> i 6 5 0 3 — 3 1 2 <

夜の下を走る列車が鳴らす汽笛が遠くからかすかに響いている。空に吊るされた月はきれいに欠けていて、地上をほのかに照らしていた。

岬までは、ほんの数分しかかからない場所ではあるが、そのような短い時間の散歩も悪くない。

夜更けに親に内緒で外へ行く興奮と、まとわりつく夏の空気では暑かった。しかし、草花にうつすら香る露や、その暗がりで歌う虫の唄、昼間とは様子の違う景色に、体のどこかはひんやりと冷えていた。

2・流星の帰郷2

岬から見える海は夜の星色に染まり、淡い青にさざないでいる。海から聞こえる波の音はやさしく、虫の唄の旋律に伴奏を奏でている。

夜露の風が薫る草原に寝転んで、しばらく星々を見つめていた。時おり、灯台の光芒ひかりが天の川と重なって、ゆらゆらと雲に乗せてやってくる。

ふと、視界の端の空にひときわ輝く星が現れた。起き上がると、その方角の空を見上げた。銀色に光るモノが弧を描きながら飛んでくるのが、はつきりと目に映った。深々しんしんと色彩を散らしながら、それはやってきた。

> i 6 6 4 7 — 3 1 2 <

手が届くのではないかと思えるほど目の前を通り過ぎ、その光はあつという間に岬の下へ落ちていく。閃光が粉となって、波しぶきの中で舞い上がる。そのまぶしさに思わず目をつぶる。

つかの間のしじまが訪れた。

夢から覚めた時のように、辺りを見回した。再び虫が鳴き始め、何事も無い日常の風景を取り戻しつつあった。しかし、何かが落ちた岬の下は、ほのかな燐光いろうに瞬いている。

気がつけば、それに引き寄せられるかのように、岬から海へ通じる道を急いで駆け下りていた。

3・流星の帰郷3

「くじらだ」

目の前にいるのは、間違いなくクジラだった。青い瞳。夜空と同じ色の皮膚。淡い桜色の斑点模様がある。

「君は、宇宙人……いや、宇宙クジラだったりして」

思い切って聞いてみた。クジラは青い目をぱちくりさせた。

「宇宙クジラと言うのは、あまりいい響きではないのう」

クジラは低い声でそう言った。見た目にはわからないけれど、このクジラは、ずいぶんおじいさんらしい。

> i 6 6 9 6 — 3 1 2 <

「わたしは、宙を旅して種を運ぶモノ。ほれ覗いてごらん」

クジラは、その大きな口を開けた。そのおおきなクジラの口のかをのぞきこむ。口の中には闇色に輝く水が貯まっていた。

「奥のほうに、輝きが見えるじやろう？」

暗がりの奥のほうで、煌く種ほしの鼓動をみた。

「きれいだね……」

「わたしらは、長い時間をかけて、この種を体内で創るんじやよ」とそのクジラは言った。

「きれいなこのほしの海に、この種を蒔こうと思ったのじゃ。それが、星をわたるわたしたちの生きる目的……」

4・流星の帰郷4

星全体が塩水でできている星から来た、そうクジラは言った。

それは、クジラのしっぽの形をした星雲の中にある星らしい。その星で産まれたクジラは大人になると、宇宙を旅する。胎内に宿る種を運ぶために。

そのクジラは、もう何万年も旅をしてきたらしい。

「旅の途中で、流星群が来たんじや。その星のひとつにつかまって旅していた。わたしのつかまった流星はどうやら、君の住む銀河系の引力に引っ張られていたようじゃ」

宇宙は、闇に色を溶かし込んでいる。

美しくも鮮やかな混沌の色。生命の塵。

時がたつのも忘れて、その夢のような幻想宇宙の話聞いていた。

> i 6 7 3 8 — 3 1 2 <

遠くで、列車の汽笛の音がする。

その音に現実を意識が戻る。海から吹く風が、髪をそつと撫でていく。

「くしゅん」

夏の夜とはいえ、海辺に吹く風は体に冷える。あんまり長くいると風邪を引いてしまう。

「おやおや、今日はもうお帰り。帰るべき温かな家へ」

「うん、また明日ね」

「おやすみ、小さなぼつや」

クジラと出会った夜は、深く夜の底に落ちていく。

4・流星の帰郷4（後書き）

あ、今、気がついた。

月が、ありえない方に輝きを持っている……まあいいや。

5・海が見る憧憬1

太陽が薄暗い東の空に顔を出して、カーテンから差し込む曙光は風に揺れている。その空は青く、そこにはひとつだけ白い塊くもがあるだけだった。

宇宙そふからやって来たクジラに、今日も会いに行く。

「くじらさん」

「おはよう、小さなぼつや」

出会ってから、クジラと毎日のように、海の上を走り遊ぶ。

毎日、毎日、くじらの背中に乗っては、楽しい日々を送っていた。

> i 6 8 3 2 — 3 1 2 <

ふしゅうつ！

と、クジラは、潮を空に舞い上げる。

太陽の光に照らされて、七色の彩が空に輝いた。

「まだ、若いものには負けんぞ」

波間を泳ぐクジラは、速い。
速い。

どんなに高い波でも、曲がりくねった波の中でも、クジラは優雅に海の上に軌跡を描いていく。

それは、とても、うれしい日々でした。

5・海が見る憧憬1（後書き）

クジラのバスは、ワンマンカー♪
すごいスピード気をつける♪

……という歌を思い出した。

だけど、このバス気まぐれで、何時につくのかわからない♪

6・海が見る憧憬2

夏の終わり。

あることに気がついてしまった。

出会った頃は、背中に乗れるくらい大きかったクジラの体が、小さくなっているような気がしたのだ。最初は、気のせいかと思ったのだが、最近になって、日に日に、小さくなっていくのが分かるくらい、その速さは見て取れるようになってきた。

そして、1週間もすると、とうとうクジラは、両手で簡単に抱えられるくらいの大きさになってしまった。

「どういうこと?」

クジラに尋ねた。

「そついう、運命なのじゃ」

手乗りクジラは言う。

> i 6 9 3 1 — 3 1 2 <

旅するクジラは、常に旅をする。自分の運ぶ種を埋める場所を探すために。

そして、クジラは、旅の終わりに青くきれいな星を見つけ……種を植えるのは、ことと決めた。そこで、自分の種を埋め……つまり、一部になりたいと。そう思っていた。

「悲しむことは無い」

クジラは、小さな声でやさしく囁きます。

「海と言う生命のスープに溶けて、あらたに産まれ来る者たちの源になるのだから」

「そういう、運命なのじゃ」
クジラは、ふたたびそう言うだけでした。

7・星の記憶1

「泣かないで、ぼうや」

クジラはやさしく言いきかせる。

でも、しばらくの間、泣いていた。涙が止まらなかった。

クジラは、落ち着くまで、黙ったまま、やさしく見つめていた。

「この星の海がきれいだから……言っていたよね」

泣きつかれ、そして落ち着いてき、やっと言葉が出る。

お別れは、さびしいけれど、だからといって、困らせたいわけではないのだ。

短い間だったけれど、大切な友人なのだ。

「……ぼく、もつときれいな海知っているよ」

ここから、列車に乗っていける場所。

列車の終着駅。

昔見た、あの海へ。

「連れて行ってあげる」

クジラを大事に抱き《いだき》、海水を吸んだバケツに移す。

——そう、もう、その時には、この青いバケツに入るくらいその体は縮んでいた。

> i 7 0 8 1 — 3 1 2 <

海の上を走る列車は、空と海の青を映している。列車に揺られて、景色を眺めていた。

「列車には初めて乗ったが、ずいぶん速く走るものじゃな」
電気を使って動くその乗り物に感嘆の声をあげている。

「ここから見える景色も、きれいなんだけど、向こうの海はもっといい場所なんだよ」

「それは、楽しみじゃな」

そして、終点の駅に降り立った。

目の前には、美しく青に染まった海が広がっていた。

8・星の記憶2

「そろそろ、おわかれじゃな」

「うん……」

クジラは海のその香りに、遠い昔のことを思い出すかのように、まるで甘えているかのようにそっと、すり寄せる。

手乗りの鳥程の大きさになってしまったクジラを、青に色づいた海に静かにひたす。

> i 7 1 3 4 — 3 1 2 <

——ぼくは、クジラをそうつと波の流れるほうに離れた。

「きれいな海を、ありがとう。小さなぼうや」

クジラはあつという間に、海を作る白い波に、泡に運ばれ、命のともし火が消えていくように、青く深い夕暮れに溶けて見えなくなってしまった。

9・水の故郷

広い海原のあちらこちらに深緑色の塊が繁っている。

それは、夕闇に包まれていく。
空には、きらめく星。

あの海のどこかに、ほしのクジラがいる。

宇宙の星は死んでも、その欠片から新しい生命が生まれ、輝き、
そして旅立つ。

ほしのくじら。

宇宙を旅する宇宙の一部。

再び果てしない星の海を旅する日が来るのだろう。

それは、気の遠くなるほどの、時の流れを必要とするのだろうか。

> i 7 1 7 3 — 3 1 2 <

列車は海の上に差し掛かる。見慣れた景色まちが見えてくる。

ここを越えてしまえば、もう別世界だ。

見知らぬ土地から、見知った土地への。

電車の窓をあけ、顔を出した。夕闇に染まった息が、ごうつと後

るのほうへと流される。

駆け抜ける風の中、思わず叫んだ。「さようなら！ さようなら！」と。

——声は列車の音の中に消えていく。

> i 7 1 7 4 — 3 1 2 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1591/>

ほしのくじら

2011年7月9日09時11分発行